

「キャリア形成論」によるキャリア意識の 形成効果の学年による違い

職業能力開発総合大学校 東京校 福良 博史

Survey of effect of career consciousness by "Career design theory" with different school year students

Hirofumi FUKURA

Summary

The purpose of course "Career design theory" is to help the students come to understand themselves and their environments. "Career design theory" was taught to the first grader and the second grader this year. It was tried that training along a different curriculum to the students of two different school years. This is comparative study of the result. And, validity of first grader training was able to be verified.

1. はじめに

現在、不況が長期化し大学は出たけれど就職できないという状況が社会問題化している。厚生労働白書（平成 22 年版）の大卒者の就職状況の推移をみると、就職率が大きく落ち込んでいるのがわかる⁽¹⁾。また、当校でも卒業生の就職率の目標は今まで 100%が例年の目標であり、ほぼ達成してきたが、昨年くらいから学生の就職活動に厳しさが見られるようになった。そのため、当校としても就職対策に力を入れるようになってきている。

そのような就職対策の一つとして、従来 2 年生で実施してきた就職に必要となる共通科目「キャリア形成論」を、平成 22 年度より 1 年生の前期に前倒しで実施することとした。それは、短大卒業後の就職を希望する学生の就職活動への支援として「キャリア形成論」が果たす役割を考えると、2 年生で実施するのでは遅すぎると判断したためである。当校の短大からの進路は、大半が進学（主に応用課程）希望であるが、短大卒業後すぐに就職を希望する者が毎年数人おり（表 1）、その場合 1 年生の秋には企業へのエントリーなどの就職活動が始まる。彼ら・彼女らの就職活動に有益となるよう、「キャリア形成論」の実施時期を企業へのエントリーなどの活動に入る前へと早めた。

「キャリア形成論」の目的は、受講生が自己理解・仕事理解に始まるキャリア形成の 6 ステップを理解すること⁽²⁾、さらにジョブ・カード⁽³⁾などのキャリアシートの作成が適切にできるようになること、それをもとにした履歴書等の記入、および面接・グループ討議などが適切に行えるようになることである。また、先行研究⁽⁴⁾では、特にグループ討議について、教材・課題等を工夫することで受講生が積極的に参加するようになることが見出された。

しかし、就職活動に資するために 1 年生の前期に「キャリア形成論」を実施することが有効なのかの検証ができていない。短大の 1 年生の前期というと、高校を卒業したばかりであり、短大卒業後に就職を希望するにしても就職活動をまだ始めていない時期であると捉えることができる。そのため、この時

期に「キャリア形成論」を実施してもあまり効果がない可能性も考えられる。一方、2 年生前期であれば、受講生の中には就職活動を経験している者もあり、そのような受講生がいるクラスだからこそ、先行研究⁽⁴⁾で示されたように「キャリア形成論」が有効だった可能性も考えられる。

平成 22 年度は前述のような経緯により、「キャリア形成論」の実施学年を切り替えた年度であり、従来同様 2 年生に実施し、かつ新たに 1 年生にも実施した。筆者は、電子情報技術科の 1 年生と 2 年生に「キャリア形成論」を指導する機会を得た。そのため、この 2 つの学年の比較ができる機会を得た。

そこで、本稿は 1 年生に対してこの科目を指導することが 2 年生に実施する場合と同様に有効であるかどうかを、2 年生に実施した場合と比較することで、確認することとした。また、1 年生に対する授業のカリキュラム構成が、従来 2 年生に実施していた内容と異なる部分が若干あったため、その影響についても考察することとした。

表 1 電子・情報系の就職・進学状況（平成 22 年 8 月 31 日現在）

科	年	卒業者	就職者	進学者
電子技術科	H22 年卒業	25	7	17
情報技術科	H22 年卒業	28	5	23
電子情報技術科 2 年	H23 年卒業見込み	(30)	2	27
電子情報技術科 1 年	—	(33)	(7)	(26)

注：当校は、昨年まで、電子技術科、情報技術科が設置されていた。一昨年から両科は募集停止となり、新科として、電子情報技術科の募集を開始した。以前の科は、定員が 20 名、新科は 30 名である。表 1 に最近の就職状況を示しておく。卒業者の列のカッコ書きは、卒業予定者の人数を示す。就職者と進学者の列のカッコ書きは、現在の進路希望者の人数を示す。

2. アンケート調査の方法

2.1 協力者

電子情報技術科の 1、2 年生にアンケートを依頼した（表 2）。

表 2 アンケート回答者人数

学年	対象人数	回答者人数	
		初回調査時	最終回調査時
1 年	33	32	31
2 年	30	30	30

2.2 調査方法と質問項目

無記名、5 択方式で各自に記入してもらう。授業の初回・最終回（9 回目）時（一部の質問は最終回時のみ）に回答を得た。質問項目は表 4 の通りである。

調査項目は以下のような観点からとらえるように考えた。

- (1) 1 年生と 2 年生の学年特有の特徴があるか
- (2) 1 年生で教えることのメリットがあるか
- (3) ジョブ・カードについての認識の深さに相違が生じるか
- (4) 1 年生と 2 年生でカリキュラムを若干変更しているが問題ないか
- (5) 1 年生と 2 年生のカリキュラムおよび講師の相違による差異があるか

表3 アンケートの質問項目

初回・最終回共通の質問	情報収集	質問 1. 業界の情報収集ができる
		質問 2. 企業の情報収集ができる
		質問 3. 業界の調査分析が出来る
		質問 4. 企業の調査分析が出来る
	対人関係	質問 5. 共同作業の計画が立てられる
		質問 6. 共同作業の進捗調整が出来る
		質問 7. 積極的に行動できる
		質問 8. 他人の考えを受け入れられる
		質問 9. 自分の考えを相手に伝えられる
		質問 10. 意見の対立を調整できる
		質問 11. プレゼンテーション原稿の作成ができる
		質問 12. プレゼンテーションができる
		質問 13. 資料をまとめ、相手に伝えることができる
		質問 14. 自分の意見を出せる
		質問 15. 相手の意見をよく聴ける
		質問 16. 質問することの大切さを理解している
		質問 17. 説得の難しさを理解している
		質問 18. 異なる意見が出ることの大切さを理解している
		質問 19. グループ討議の有効性（有意義）を理解している
	自己特性	質問 20. 普段は活発です
		質問 21. 普段は相手の話をよく聴く
		質問 22. 普段は授業でよく質問をする
		質問 23. 普段、授業への態度は積極的です
最終回のみ質問	受講意義	質問 24. キャリア形成論をとおして就職に対する心構えができた
		質問 25. キャリア形成論をとおして就職に対する興味・関心ができた
		質問 26. キャリア形成論をとおして学業に対する目的意識が出てきた
		質問 27. キャリア形成論をとおして学生生活全般に目的意識が出てきた
	JCの意義	質問 28. ジョブ・カードは自分の理解に有益
		質問 29. ジョブ・カードは自分を PR するために役立つ
		質問 30. ジョブ・カードは自分を PR するための補助として役立つ
		質問 31. ジョブ・カードは自分の強み・弱みの発見に有益
		質問 32. ジョブ・カードは就職の面接準備に有益
		質問 33. ジョブ・カードは自分の課題発見の一助になる
		(以上、5 択形式)
		質問 34. 自由記述の意見

上述の(1)から(5)の観点と表 3 のアンケート項目の各質問との関係を以下に説明する。

(1)および(2)は、特に質問 1 から 4 について、およびその他の質問に対しても、何らかの違いがあるのか否かを観察してみようと考えた。

(3)は、キャリアシートとしてのジョブ・カードを考えたときにジョブ・カードに対する具体的な認識について、かなり詳しく指導すべきか、そうでなくても同程度の認識を持てるものか、を確認するために、1 年生は、1 回目に詳しい説明を実施し、その他の回においては特別説明をしないようにした。2 年生に対しては、2 回目にジョブ・カードの説明を行い、途中の回でジョブ・カードを記入してくる宿題を課し、8 回目に様式 1 から様式 5 までを記入した事例を用いたケーススタディを実施した。このように 2 年生に対しては色々な角度からジョブ・カードというものを具体的に触れる機会を多くし、ジョブ・カードに関する質問 28 から 33 を最終日に行い、1 年生と 2 年生の相違を観察することとした。

(4)は、1 年生と 2 年生でのカリキュラムの相違点については、質問 5 から 23 を行うことにより観察することとした。

(5)は、最終回に追加質問を行い、その結果を観察することとした（質問 24 から 27）。

各項目について、「非常にあてはまる」「あてはまる」「どちらとも言えない」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の 5 点法で回答してもらう。「非常にあてはまる」を 5 点、「全くあてはまらない」を 1 点とし、平均値や標準偏差を算出した。

2.3 カリキュラムの構成と内容

(1) 今年度のカリキュラム構成

1 年生のカリキュラム概要（表 4）、および 2 年生のカリキュラム概要（表 5）を示す。どちらもグループワーク形式を採用している。1 年生は原則、全科統一の標準カリキュラムであり、2 年生はジョブ・カードおよび昨年から試行している文章理解・論理的説明などのケーススタディを加えてある。1 年生は未だ高校を卒業したばかりであるから、業界についてもまったく無知と考え業界研究を取り入れた。しかし、2 年生は 1 年間の学習経験を積み、学生によっては就職体験も加わっており、業界に関するイメージはすでに持っていると考えた。そこで 2 年生に対しては、より実践的な自己のキャリアへの理解を深めるように配慮し、そのためのツールとしてジョブ・カードを用いた。

表 4 1 年生のカリキュラム概要

1. オリエンテーション、ジョブ・カードの説明
2. キャリア形成の意味
3. キャリア形成の 6 ステップ
4. 自己理解
5. キャリアマトリックスを利用した職業理解
6. 自分のキャリアデザイン
7. 業界情報の調べ方と公的資料による社会・業界研究
8. 企業情報の調べ方と公開資料による企業事例研究
9. まとめ

電子情報技術科 1 年生は 3 人の講師が分担し指導した。分担は、1 回目の担当、2 回目～6 回目の担当、および 7 回目～9 回目の担当の 3 人による分担とし、1 回目から 6 回目までは、筆者が補助、7 回

目～9回目は筆者が担当した。2年生は、昨年同様すべて筆者が担当した。

表5 2年生のカリキュラム概要

1. オリエンテーション、キャリア形成の6ステップ
2. 自己理解、ジョブ・カードの説明
3. 文章理解のケーススタディ
4. 論理的なことがらの整理・説明のケーススタディ
5. 業界情報の調べ方とケーススタディ
6. キャリアマトリックスを利用した職業理解
7. 企業情報の調べ方と ジョブ・カードを利用したキャリアデザイン
8. ジョブ・カード事例のケーススタディ
9. まとめ

(2) ジョブ・カード指導時の特記事項

ジョブ・カードについては、1年生に対しては概要を説明した。2年生に対しては概要のみならずキャリア形成の道具としての書き方を提示し、かつケーススタディを実施し、より深く定着化を図った。以下に2年生に対する指導内容を示す。

2回目の講義終了時にジョブ・カードの様式1から様式4までを強制はしないが宿題とした。様式4までの記入は半数の15名が書いてきた。6回目の講義のときにキャリアデザインを具体化する方策を兼ねて、ジョブ・カードの様式5を書いてくるように宿題とした。様式5を書いてきた学生は5名、そのうち具体的に方向性が描けている学生は3名のみにとどまった。このことから自分のキャリアデザインを個別に指導せずに、今時点で描ける学生が非常に少ないということがわかった。8回目の講義は演習として、ジョブ・カードのケーススタディを実施した。学生を5グループに分け、各グループでキャリアコンサルタントの擬似体験をしてもらい、最後にグループごとにOHPを用いて発表を行った。

このケーススタディには、キャリアコンサルタントの講座で用いられている「今田就次」⁽⁵⁾のプロフィールとジョブ・カードの様式1から5までを用いた。モデルの年齢が26歳、大卒後4年間フリーターというプロフィールのため、年齢的に学生に身近な人物像であり、理解しやすいと考えた。大半の学生が熱心に討議し、いろいろな意見が出された。

このとき学生が発表した主な意見を紹介する。

意見1. アルバイトが長続きしなさすぎる。

意見2. 苦手なところを直す努力をしていない。

意見3. 資格を未だに何も持っていない。

意見4. 自分のスキルを向上させる努力をすべき。

意見5. あきらめずに沢山、会社をうけるべき。

意見6. 希望理由に「なんとかなる」と書くのはおかしい。

意見7. 自分の印象を悪く書きすぎ。

意見8. 自分の目標が伝わってこない。

以上のことから、学生が自分のキャリア・デザインを紙に書き上げるのは、未熟ではあったが、ケー

ススタディとして例示した内容に対しては、かなり厳しく、まじめな討論・発表が行われた。

(3) 2年生対象の情報理解・表現力養成方法についての特記事項

2年生対象に、3回目の講義は、情報理解の演習、4回目の講義は、表現力養成の演習を昨年と同じように実施した。情報理解の演習（カフカの短編の解釈）は、先行研究⁽⁴⁾と同様の展開となった。しかし、表現力養成の演習（簡単なゲームのルールを説明）は、前回と同じ展開にはならなかった。各グループが考えたゲームは、ジャンケンが2グループ、鬼ごっこ、およびトランプのババ抜きが各々1グループの4グループに分かれてゲームのルールの分析・整理・説明を行った。ジャンケンをテーマに選んだグループは、2グループあり、一方が文書のみで定義を記述し、もう一方は図を交えて勝ち負けの三つ巴を表現し、という具合にそれぞれグループごとに独自の表現方法を用いていた。ゲームのルールの発表内容は、4グループ共にあまりルールの説明に瑕疵がなく、私自身がいくつか質問しただけで、学生からの質問・疑問が前回かなり活発だったことと比較して大きく異なり、今回は皆無の状況となった。これは、前回学生たちが考えたゲームと比較して今回学生たちが考えたゲームがかなり簡単すぎたのかもしれないと考える。今後は、ゲームの種類を限定し、やさしすぎず、難しすぎず、というものを複数用意し、その中から選択するような形式にしたほうが効果的かもしれないと考える。

3. アンケート結果及び考察

3.1 授業前後のアンケート結果

初回と最終回（9回目）にアンケートを実施し、初回の授業開始前と授業の最終回までの意見の変化を調べることにした。また、最終回のアンケートには、質問項目を追加し、この授業により得られたことの有無をも質問した。

表6は、1年生の初回と最終回の比較を、表7は、2年生の初回と最終回の比較を行った。表中の最後の行に示されている「平均の増加度」とは、初回と最終回にアンケートを実施した結果、平均が増加しているか否かをみるために、最終回答の平均から、初回答の平均を差し引いた値を示している。もし平均が上がり、逆に下がっていると、マイナスの値となる。つまり、この科目の効果をプラスが大きいほど効果が高く、マイナスが大きいほど効果が低いと評価されることとなる。しかし、アンケート結果のため、若干の誤差を見込んでおかなければならない。無視しうる誤差をどこにするかが問題となる。明快な根拠は無いが、 ± 0.3 未満の範囲内の増加度は誤差として無視することとする。

質問1から4までの業界・企業の調査・分析ができるか否かの質問に対し、1年生の初回は平均がすべて2.60以下となっている。最終回に質問したときには、4項目共に平均が3.19以上を示し、平均の増加度が0.62以上となっている。2年生の場合は、質問1と質問2の情報収集は、初回から3.10以上で、最終回にもあまり差が見られず、増加度は0.06以下となる。質問3と質問4の調査分析の場合は初回が2.73以下となっていたのが、最終回の質問に対しては3.00以上となり、増加度は0.30以上あった。この分野の質問に対する1年生の増加度は、2年生と比較すると、1年生が最低でも2年生の2倍以上の開きがあり、質問2については増加度が20倍以上開いている。これは、高校生までの授業と異なり、業界・企業がどのようなものかわからない状況から、このキャリア形成論およびその他の講義・実習などを通して自分の経験が積み重なってきた結果、情報収集・分析については自信がついてきつつあるためと思われる。